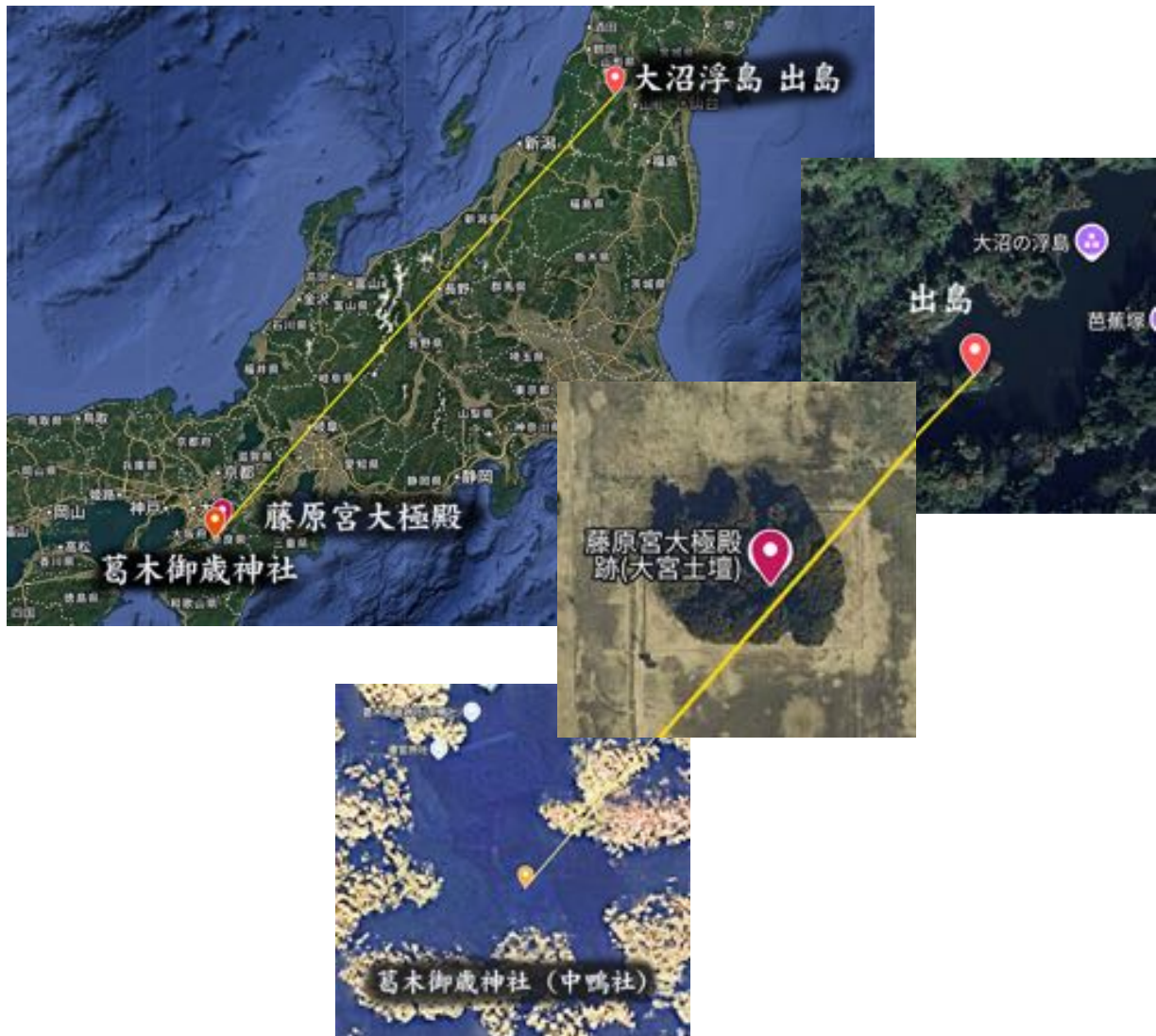


藤原宮大極殿

●平城京の前の藤原京（694～710 年）が気になってきた。造った持統天皇は女性天皇。かなりの実力者だったらしい。役の小角が朝日岳を開いた白鵬 8 年（679）、大沼を開いた白鵬 9 年（680）のおよそ 15 年後のこと。和銅元年（708）最上川より南の地域に越後国出羽郡を新設し出羽柵が置かれた。大沼や大朝日岳のある朝日町も出羽郡となる。持統 10 年（696）大沼大行院は朝日権現堂を再興し、和銅 2 年（709）には朝日山箕輪において大宿を立て極楽寺と号すとある。もうすでに大沼大行院は朝廷の後ろ盾があったということだろうか。持統 13 年（699）に役の小角が伊豆大島に流され、2 年後の 701 年に赦されたが同年に入寂している。出雲族出身の役の小角に何があったのだろう。和銅年間（708～14 年）には信越地方より、山形県内陸部に多くの移住があった。そして和銅 3 年（710 年）に平城京遷都。翌 4 年（711）年には興福寺創建。秦氏が伏見に稻荷神社を創建し、いよいよ奈良時代が始まった。さっそく祭祀線を探してみた。



■葛木御歳神社 →→→ 藤原宮大極殿 →→→ 大沼浮島（出島）

■藤原京大極殿

宮城（大内裏）の朝堂院の北端中央にあり、殿内には高御座が据えられ、即位の大礼や国家的儀式が行われた。中国の道教では天皇大帝の居所をいう。「大極殿」の名は、万物の根源、天空の中心を意味する「太極」に由来する。ゆえに中国においては太極殿といい都城内の建物に起源をもち、三国時代の魏の明帝青竜3年(235)、「北魏洛陽城」において太極殿が初めてであるとされるため、大極殿を「だいぎょくでん」とも読む。すなわち、帝王が世界を支配する中心こそ「大極殿」の意である。日本最初の大極殿が置かれた宮殿については、飛鳥浄御原宮説と藤原宮説に分かれている。

●呪符木簡

災いの原因となる邪気や悪鬼を防いだり、駆逐するための呪文や符号を書いた木札を呪符木簡というが、7世紀に出現する。7世紀の例は全国で8例あるが、そのうち6例は藤原宮跡から出土している。

■葛木御歳神社

主祭神/御歳神（みとしのかみ）大年神と香用比売命（かぐよひめ）の御子神。

相殿/大年神（おおとしのかみ）須佐之男命が大山津見神の娘神の神大市比売命を娶ってお生まれになった。宇迦之御魂神の兄神

高照姫命（たかてるひめのみこと）大国主命が宗像三女神の一柱を娶ってお生まれになった。味鋤高彦根命、事代主命の妹神

主祭神はご本社の方の背後の御歳山にお鎮まりになって、五穀豊穰をご守護された神であります。

創祀は神代。古来より朝廷で 豊作祈願のために行われた年頭の祈年祭には、まず本社の御歳神の名が「御歳皇神 - みとしのすめがみ」として読みあげられました。

古書の記録では、仁寿二年（八五二年）には、大和国で本社だけが最高の正二位の神位を授かる程篤く崇敬され、後に従一位に昇格され、延喜の制では、名神大社に列した神社として尊ばれた古社で、全国の御歳神、大年神の総本社であります。

本社は、古代鴨氏が祭った名社で、御所市にある高鴨神社(上鴨さん)、鴨都波神社(下鴨さん)とともに中鴨さんとして親しまれています。 奈良県御所市東持田269番地

■大沼浮島（役の小角・弁財天）

湖畔にある大沼浮嶋稲荷神社（祭神/宇迦之御魂神）の神池とされ狐の形をしている。沼には大小の葦の島が風や流れに関係なく浮遊し、江戸時代には国の数 32 あり、その動きで吉凶を占っていたとされる。沼は白竜湖とも呼ばれ弁財天が祀られている。大円寺『朝日嶽縁起』（1505 年）によると、朝日岳の麓に御手洗の「大富沼」があると記されている。

白鳳9年（681）役の小角が弟子の覚道を連れて出羽路に来た折、大谷川（朝日町大谷）のほとりで梵字が記された板碑が流れくるのを見つけ、川をさかのぼり、60 余りの島が浮遊する神池大沼を見つけた。湖畔に浮島稲荷大明神を祀り、弟子覚道を別当（大行院）とし朝日岳修験が行われた。739 年には行基が訪れ浮島 66 個に国の名前を付けた。建久4年（1193）には寒河江荘地頭となった大江広元の進言により源頼朝の祈願所になり、その後も大江家、徳川家、最上家にも祈願所として崇敬された。国指定名勝。

山形県西村山郡朝日町大沼

備考/浮島は、現在は数も減り、岸に付き動かないことが多いが、動く時は流れや風に関係なく意志があるかのように動き回り驚く。出雲族東王家の富家の人々は出雲から大和の葛城山東側に移り住んだとされる。役の小角の生誕地は奈良県御所市茅原。まさに葛木山の東に位置する。大沼を「大富沼」、大朝日岳の神を「大富権現（弁財天）」と名付けたのも役の小角だろう。役の小角が天孫族秦氏の稲荷神を祀ることはありえない。なにより伏見稲荷よりも古い歴史になってしまう。730年に「大沼社を南西の丘に移す」記述があるので、その時に秦族がやってきて主祭神を弁財天（瀬織津姫）から稲荷神に変えたのだと思われる。徐福が連れてきた海童たち秦族は蓬莱島信仰を持つ。自由に動き回る浮島は相当に魅力的だったはず。古い祭祀線はほとんどが稲荷神社ではなく大沼の鳥居の立つ「出島（弁天島）」（写真）が起点となっている。

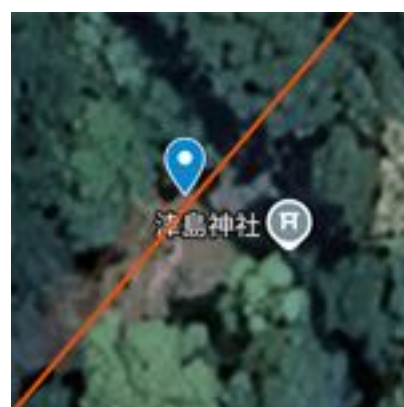
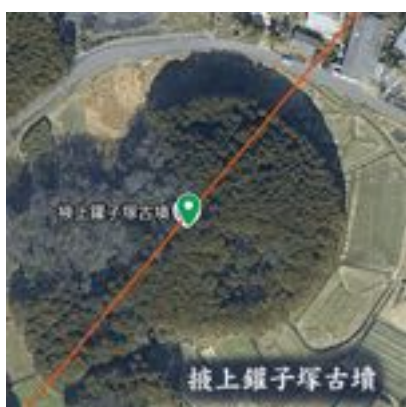


●いきなり出雲族の神社とつながり驚いた。リスペクトしている「出雲口伝」や伝承によると、出雲王国は東出雲王国と西出雲王国があり、代々主王と副王は交代で務めていたらしい。八代目は、主王が西出雲王家の大国主命が務め、副王は東出雲王家の事代主命が務めていた。しかし、二人は徐福により洞窟に閉じ込められ暗殺されてしまった。悪事がばれた徐福はいったん秦国に逃げ帰った。その出来事の後、穢れを嫌った出雲分家たちが約半数の出雲人たちを連れて大和に移住した。神奈備山信仰や太陽信仰は三輪山に当てられた。西出雲人は葛城山東麓に入り事代主を祀る鴨都波神社や一言主神社を創建。西出雲人は南葛城に入り味耜高彥を祀る高鴨神社、そして大年神や高照姫を祀る「御歳神社」を創建している。御歳神社は大和の始まりの神社と言えるほど古い歴史を持っているのだ。またも出雲聖地の間に藤原京は造られていた。

●次に大朝日岳とつなげてみた。



■妻の杜神社 中社 → 阿弥陀寺 → 岩倉大師堂 → 琴弾原白鳥陵 → 掖上鑑子塚古墳 →
→ 藤原宮大極殿跡 → 津島神社 → 大朝日岳



■藤原宮大極殿跡（大宮土壇）

藤原宮跡は橿原市高殿町・醍醐町などに所在する都城遺跡で、『日本書紀』によると藤原宮は持統 8 年（694）に飛鳥宮から遷都し、和銅 3 年（710）の平城遷都まで用いられた。藤原京は中国的な都城制による日本最初の首都であり、大宝元年（701）には大宝律令が制定・施行された日本古代史上で重要な宮都である。昭和 9 年（1934）12 月から昭和 18 年（1943）8 月まで実施された日本古文化研究所による発掘調査で、大宮土壇を大極殿跡とする朝堂院の位置と規模がほぼ確定した。

奈良県橿原市醍醐町 1 7 - 1

■大朝日岳（朝日連峰・朝日岳）

磐梯朝日国立公園の朝日連峰主峰。五所神社縁起書によれば、天武天皇の治世、白鳳 8 年（7 世紀末）、朝日嶽、岩上嶽（祝瓶山）に役行者が参籠修行し開山したという。『三大実録』には「出羽国の白盤神と須波神に従五位下を授けた」とあり、須波神は朝日岳のことで龍蛇神の諏訪神とされる。大円寺『朝日嶽縁起』（1505 年）によると朝日嶽大富権現は、大富権現・女躰権限・子守権現の三処であり、本地佛は、

大富権現は**弁財天**（初頭神は大山祇神）、女躰権現は**大日如来**（木花咲耶姫命）、子守権現は**正観音**で大山祇神の娘**溝織姫命**であるとする。役の小角が出逢った女神は女躰権現。「朝日嶽信仰」は執権北条時頼（1246～56）によって千年封じされたまま現在に至る。

山形県西村山郡朝日町立木番外地



●三処とは、大朝日岳、中岳、西朝日岳ではないかと思われる。

■妻の杜神社 中社

妻の杜は、和歌山県橋本市にある。東、中、西と3か所あり、西の森の場所に万葉歌碑が建てられている。

「紀の国に 止まず通わむ 妻の杜 妻寄しこせね 妻といひながら」
紀の国へは 度々通うことにしよう。そこには妻の神のいる森がある。その名の通りならきっと妻を授けてくれるだろう。どうか私にも良い妻を。」

この歌は大宝元年（701）の持統、文武両帝の紀伊国、紀の温湯（きのゆ）（白浜温泉）行幸の際に、その従者の一人が詠んだものである。

和歌山県橋本市妻 2-5

■阿弥陀寺 詳細不明 和歌山県橋本市妻2丁目4-17

■岩倉大師堂

由緒書によれば、旧街道は隅田川に沿って通っており、岩倉の巨巖の谷間の畔に御堂があって信仰の地となっていたが、時が経つにつれて、御堂は崩れ、祀る人も絶えて、本尊の弘法大師像は村内の阿弥陀寺（高野山真言宗の寺院で、『紀伊続風土記』に一文あり。「真言宗古義垂井村大高能寺末、村の西端にあり」とだけ記されている）に移されて数十年が過ぎた頃、信仰の厚い女性の夢に大師像が現れて元の地に戻して欲しいとのお告げがあり、地元の人々の支援により、昭和42年（1967年）3月31日に岩倉大師堂を建立した。※境内由緒書より

和歌山県橋本市紀ノ光台1丁目

■琴弾原白鳥陵（日本武尊陵）

記紀に語られるところによると、日本武尊は蝦夷討伐から大和へ帰還する途中に能褒野（三重県亀山市能褒野王塚古墳に治定）で崩じたのち、白鳥に姿を変えて琴弾原（奈良県御所市）、旧市邑（大阪府羽曳野市白鳥大塚古墳に治定）に舞い降りたとされています。そのため陵墓も3箇所が存在しており、そのうち2番目の琴弾原がこの地域となります。※御所市の説明板より

奈良県御所市富田

■掖上罐子塚古墳

奈良盆地南西縁、国見山から北に延びる丘陵の先端部を切断して築造された大型前方後円墳である。築造時期は、古墳時代中期の 5 世紀後葉頃と推定される。通説では南葛城地方では室宮山古墳に後続し、屋敷山古墳に先行する首長墓に位置づけられるが、室宮山古墳から規模を大きく縮小して形状にも規制が入る点に注意される。近年では、時期がさらに下がって屋敷山古墳と同程度の時期になるとして、室宮山古墳との間に 1 世代の空白を想定する説も挙げられているが、小規模な調査に留まるため詳細は明らかでない。なお、谷間という奈良盆地からの仰望が制限された立地でもあることから、ヤマト王権に滅ぼされた葛城本宗家の葛城円・眉輪王らの墓に比定する説もある。奈良県御所市柏原

■津島神社

祭神/素盞鳴尊

津島神社（広場に祠）と脇に山の神が祀られています。山の神は女性の神とも言われますが、子孫繁栄のための男性のシンボルが祀られています。勸進縄も男性のシンボルになっています。滋賀では珍しい性神です。※グーグルクチコミより抜粋

滋賀県甲賀市甲賀町岩室 1760

●メインは掖上罐子塚古墳や琴弾原白鳥陵そして妻の杜神社 中社だろうか。妻の杜神社の和歌は大宝元年（701）文武両帝の紀伊国、紀の温湯（きのゆ）（白浜温泉）行幸の際に、その従者の一人が詠んだものとある。まさに藤原宮の時代である。和歌は祭祀の力も持つとも言われている。

藤原実方が大沼浮島を訪ねた時に、沼は鬼神により松の木の上にかかるほどの大波を立てて荒れたが、和歌を詠んで鎮めたという逸話が残っている。また、和歌は表だった意味と、裏に秘められた本当の意味を持たせて祈りとする場合があるらしい。たわいのない内容でも侮れないらしい。

「妻が欲しいので紀伊國には何度も来よう」は、この神社を祭祀線で結ぶことを表したのではないだろうか。裏鬼門と対峙する鬼門の大朝日岳を妻と表したなら「都に大朝日岳の神気を引きたいのでこの神社で何度も祭祀をしよう」と考えられるのでは… などと妄想する。

●次は湯殿山を調べてみた。



■久米寺大塔礎石 → 藤原宮大極殿 → 湯殿山神社ご神体岩

■久米寺 大塔礎石（東塔）

大和三山の1つ、畝傍山の南方に位置し、橿原神宮からも近い。開基は聖徳太子の弟・来目皇子（くめのみこ）とも久米仙人とも伝わるが、詳細は不明である。また、創建年代は推古天皇2年（594年）ともされるが、これも詳細は不明である。



『和州久米寺流記』には来目皇子の開基を伝える。一方、『扶桑略記』『七大寺巡礼私記』などは当寺を久米仙人と結び付けている。久米仙人の伝説（後述）がフィクションであることはいうまでもなく、創建の正確な事情は不明だが、ヤマト政権で軍事部門を担当していた部民の久米部の氏寺として創建されたとする説が提唱されていた。しかし、境内で出土した瓦と同じ木型で作られた瓦が藤原宮と興福寺から出土していることなどから、興福寺前身寺院の厩坂寺に比定する学説が現在では有力である。境内には東塔の大きな礎石が残り、境内から出土する瓦の様式から見ても創建は7世紀末（白鳳時代）にさかのぼると思われる。

空海（弘法大師）は当寺の東塔において真言宗の根本經典の1つである『大日経』を感得（発見）したとされている。空海が撰文した「益田池碑銘并序」には、「来眼精舎」（くめしょうじゃ）として言及されており、空海とは関係があったと思われる。唐に留学した空海が大同2年（807年）に帰国すると、当寺で真言密教を宣布している。このため、当寺は「真言宗発祥の地」とされ、空海が真言宗を開く端緒を得た寺として知られている。Wikipediaより抜粋

東大寺で受戒をした空海は、夢のお告げを受けていました。このお告げによると「久米寺の東塔に探し求めるものがある」というものでした。空海はお告げの通り久米寺の東塔から『大日経』というお経を発見しました。このお経は正式には『大毘盧遮那成佛神変加持经』というもので、今まで空海が読んできたお経とはまったく内容の違う難しいものでした。そのため、この『大日経』をより勉強しようにも、日本にはこのお経について内容を理解して教えてくれる人はいませんでした。

空海はこの『大日経』との出会いによって、より深い仏の教えを理解したいという気持ちが大きくなり、唐に渡りたいという強い思いを持つようになりました。

泉蔵院サイトより抜粋

奈良県橿原市久米町502

■湯殿山神社

出羽三山の御開山は千四百年余前の推古天皇元年（593年）、第三十二代崇峻天皇の御子蜂子皇子が、蘇我氏との政争に巻き込まれ、難を逃れるために回路をはるばると北上し、出羽国にお入りになりました。そして三本足の霊鳥（れいう）の導くままに羽黒山に登り羽黒権現の御示現を拝し、山頂に祠を創建され、次いで月山、湯殿山を次々と開かれました。その後、皇子の御徳を慕い、加賀白山を開いた泰澄や修験道の祖ともいわれる役ノ行者、真言宗の開祖空海、天台宗の開祖最澄などが来山し修行を積んだと伝えられています。

古は本地仏として永遠の生命の象徴である大日如来と全てのものを産み出す山の神(大山祇命が垂迹神として祀られたことから、「未来の世を表す山」といわれる。

野性味あふれる自然が広がる湯殿山(標高 1,500m)は、月山に連なり、湯殿山神社はその中腹の溪流のほとりに鎮座している。

古来、出羽三山の奥の院とされ、修行した山伏が即身成仏する場所とされ、今もなお山伏が修行をする「行場(ぎょうば)」でもある。

湯殿山神社の御神体は、熱湯の湧き出る茶褐色の巨大な霊巖である。「語るなかれ、聞くなかれ」といわれ、神秘のヴェールに包まれてきた。自然崇拝の原型を今に留めている。



月山から西に尾根づたいに下りること 8 km、月山の絶頂より流れ落ちる梵字川のほとり、幽邃(ゆうすい)な仙境に、悠久の太古より、滔々(とうとう)と霊巖とを御霊代(みたましろ)として、大山祇命、大己貴命(おおなむちのみこと)、少彦名命(すくなひこなのみこと)の三神が鎮まる湯殿山神社(1,100m)がある。三山が神仏習合であった時代、三山を抖擻(とそう)する修行を「三関三渡(さんかんさんど)の行」といった。

羽黒山は聖観世音菩薩(現在)、月山は阿弥陀如来(過去)、葉山や薬師岳は薬師如来(未来)とされ、それらの加護と導きにより現在・過去・未来の三関を乗り越え、湯殿山の太日如来(三関を超越した世界)の宝窟(ほうくつ)に安住し、即身成仏(生きたまま悟りを開く)の妙果を得るというものである。

裸足になって御神体に登拝するのは、大日如来と一体になって感得することである。湯殿山神社の背後から 30m の鉄の梯子を下りると、御滝神社の滝壺に出る。

滝は、梵字川の激流が湯殿山神社の御神体脇を急に落下して、巖を噛んで流れる。昔はこの滝を不動尊として拝したが、今は瀬織津姫神を拝する。

この滝から神橋に至る間の両岸には 13 の末社が祀られ、この末社を巡拝することを御沢駈けという。

真夏でも肌に突き刺すような雪解け水に滝の行をする行者が多い。

湯殿山神社本宮では、参拝に際して現在でも履き物を脱ぎ、裸足になり、御祓いを受けてからでなければお詣りは許されない。俗世とは切り離された神域である。

●またまた由緒あるお寺とつながった。ただ本堂ではなく東塔。空海が大日経をこの東塔で見つけたので真言宗発祥の寺院とされている。久米寺の創建は推古天皇 2 年 (594 年) なので、藤原京遷都のちょうど 100 年前になる。本堂と祭祀線がつながらなかったため、東塔を建ててつないだのだろう。なので、東塔の建立は藤原京遷都時 694 年頃ということになるのではないかな。

●月山神社や出羽三山神社ともつないでみたが、残念ながら裏鬼門の神社は見つからなかった。

●久米寺よりも葛木御歳神社のほうがかなり古いので、やはり大沼浮島と葛木御歳神社の間に藤原京大極殿も作られたことになる。そして大朝日岳や湯殿山ともつながるために東塔や寺社などを置いたと思われる。